

えひめの歴史文化モノ語り

県歴博収蔵資料から ②⑧

関ヶ原合戦の後、伊予半国ずつを知行した加藤嘉明と藤堂高虎。不仲だったという話を耳にしたことはないだろうか。本書は、その発端にまつわるもの。

慶長の役で、2人は水軍を率いて転戦。1597(慶長2)年7月15・16日の巨濟島(唐島)沖の漆川梁(チルチヨンリヤン)海戦で、2人は勝利に貢献し、翌8月に豊臣秀吉から2人とも戦功を認められることになる。しかし、現地での具体的な評価は、また違つて展開を見せた。高虎が軍目付(いぐさめつけ)から「一番」と認定・称賛されたのに対し、嘉明は規律違反や非礼を非難・叱責(しっせき)されるといふ、対照的な評価となった。

これに対し嘉明は、高虎が秀吉へ勝手に戦功を直接注進したとして、軍目付の早川長政・竹中重利や阿波の蜂須賀家政へ告発・非難し、巻き返しを図るつもり

はらずで、自分も同様に見たままを確かに上申するつもりだと、特段問題視せず肅々と対応しているように見受けられる。

同じ時の竹中や蜂須賀の返書では、嘉明の告発に一定の理解を示し、竹中にいたっては高虎の勝手を非難し、嘉明の腹立ちも当然で、手柄は明らかにするべきだ

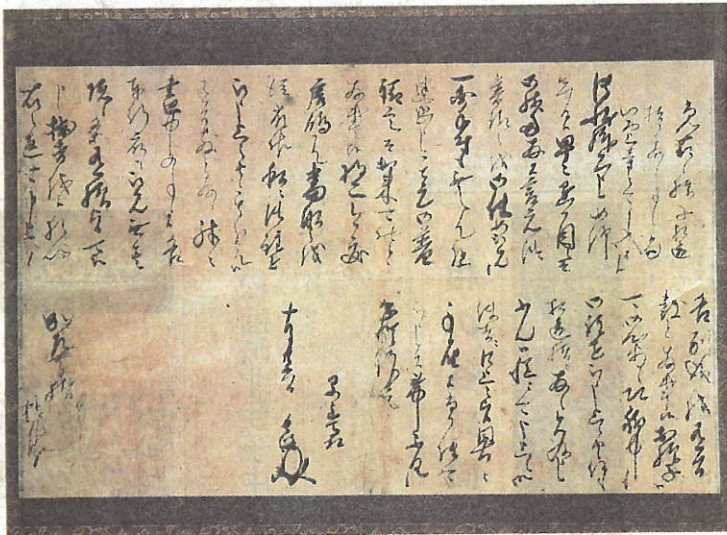
同じ軍目付でも竹中の気遣いは趣が異なる。彼らの性格や嘉明との距離感の違いが表れているのかもしれない。興味深い。

最終的には翌年に2人も加増されるが、海戦の直後に現地で示された具体的な評価が改められた様子はなく、長い確執を生むことになった。関ヶ原合戦後の伊予折半時には協定を結ぶが、互いに領境を警戒し、あわや衝突という拝志騒動も起きた。

伊予の大名同士、嘉明と高虎の不和の始まりとされる出来事を、生々しく伝える一通である。

嘉明と高虎不仲の発端

早川長政書状 (加藤嘉明宛)



早川長政書状(加藤嘉明宛)、1597(慶長2)年10月26日 県歴史文化博物館蔵

(専門学芸員・山内治朋) 〔随時掲載します〕